

ぬ場所で黙々と職務にはげんでおられる人々には、ただ感謝あるのみである。

文学部 助手 都出比呂志

図書館改革のために利用者の声が、この欄で、いくつかとりあげられた。それらは、すべて京大内の人の声である。もちろん、京大図書館の改革が問題にされているのだから、それは当然であろう。

しかし、一度京大人を離れて一般市民になったつもりで、ながめれば、京大図書館はどう見えるだろうか。

京大図書館創設の際には、民間から図書寄贈の援助があり、その利用も一般市民に開くという精神で出発したと聞いているが、いまの現実はどうであろうか。

館の利用規定は、確かに学外の人にも利用できる仕組になっている。ところが「部局長の許可が必要」という但し書きがついている。もちろん、「部局長の許可」は一つの「形式」である。この規定を撤廃して、図書サービスを、無統制で、無責任な体制にせよと言いたいわけではない。だがこの「形式」の背後には、案外かなり重い「実質」がかくされているのではないだろうか。

私は、図書館の利用者であると共に、助手として研究室図書利用サービスの仕事の一端を受け持っている。他大学や民間の人が、研究室の図書を利用にこられた時、できるだけ便宜をはかりたいつもりでいるが、それに追われていたのでは研究が阻害される。するとつい、おっくうげな対応をしがちになる。研究室図書を例にあげたのでは特殊かも知れないが、問題の大小はあれ、この矛盾は京大内のどの図書館にもあるのではなからうか。大学外の人も利用し易く、かつ、便宜をはかる人の負担をも軽くしようとすれば、結局は人員と設備をふやすしかないだろう。図書館「近代化」のためにコンピューターの導入も結構だ。しかし、その「合理化」によって、従事者の人員を減らし、利用しにくいままの帝国大学図書館の現状を固定するのではなく、人員と設備を拡充して、まさに、「大学の外へも開かれた」ものへの改革が必要なのではないだろうか。

化学研究所 助手 植村 栄

図書室といえば入学以来、教養部、各学部の教室、さらに研究室と時と共に利用する場所こそ違え随分とお世話になって来たが、それぞれが中央図書館と結び付いているということ、あるいは全学の図書施設の一部なのだと感じるのは単行本の受入手続きの度にその本が一時預かりされている時である。随分と時間のかかるものですね。コンピューターをいれて迅速になるものならやって頂き度い。次に感じたこと。古い雑誌の表装、これは相当服をよごすものが時にありますね。貴重なものですから表装し直して後輩のため保存して頂き度く思います。古いものといえばバックナンバー、もっと充実してほしく思います。が、こういうものや学位論文など全てマイクロフィルムに切替えればいいですね。

以上この10年間の経験から具体的に改良して欲しい点ですが、意外と少ないものですね。

こんな小さな点でも実行しようとすれば予算が相当かかるでしょう。大学改革には予算の裏付けが必要な面が多いですが、それ以上に各人の意識が変わらない限り進めない。しかし今回のライブラリーシステムで改善しようという——これを改革というのかどうか知りませんが——実際的な問題の場合はまづ予算の裏付けが一番大切なことでしょうね。予算の額即改善の幅ということになるのではないのでしょうか。大学改革担当文部大臣も留任になったことだし直訴でもしますか。いやこれは大蔵省の問題ですね。館長さん、総長さん頑張って下さい。